

令和4年9月1日

南の風アカツキジャパン女子日本代表特集号Ⅵ

南部地区ミニバスケットボール連盟

会長 藤原 敬一

ラトビアとの第2戦の第3Qは、オフェンス課題を残すクォーターになりました。

ゲームのハイライトと感想を交えて書きます。

後半は、安間 (PG)、ひまわり (SG/SF)、東藤 (SG/SF)、オコエ (PF)、高田 (PF) という布陣でスタートした。開始2分あまり日本はオフェンスの状態が上がらない。外でパスを回しての3P シュートが外れる。速攻から1on1のペイントドライブがやや強引になり、潰れることが続く。流れを掴みたい日本は、高田のドラッグスクリーンから安間がジャンプシュートを放つが決まらない。

その間にラトビアのペイントアタックに2回やられ、リズムに乗れない。日本は選手交代して、平下、渡嘉敷、宮澤を投入する。直後ラトビアのエースポールベレの3P シュートのリバウンドに飛び込んだグルベにひまわりがファウルをしてしまう。(ひまわりのファウル自体は仕方ないと思われる) 相手をカバーした後の、ボックスアウトのローテーションミスであり日本らしからぬものであった。

日本は PG を山本に替える。ひまわりもステファニーと交代する。ここで山本はボールを運び、左サイドをアイソレイトし、ペイントアタックからフローター気味のシュートを決める。第3Q 初得点となる。(3分間得点がなかった)

その後も中々流れに乗れない日本は、ファウルがかさみ4ファウルとなる。ここで再び PG を本橋に交代すると、すぐさま3P シュートを沈める。本橋は続けてP&Rを利用して2P シュートも決める。そして流れを引き寄せるかのように、交代して出た東藤がパスに合わせてゴール下に飛びこみ、ディフェンスをフェイクで冷静に交わして得点する。

残り時間3秒弱で、スローインの本橋がリングに走り込んだひまわりにパスしてアーリーウープ(決まらなかったが)は絶妙のタイミングであった。第3Q 終了52対38日本がリード。

このクォーターはオフェンスに課題を残しました。ゾーンに対してどう攻めるか、オフェンスリバウンドをチームとしてどう取るか(この試合に関してうまくできていなかったのか?)、また恩塚 HC が目指す、『原則の落とし込み』や『即興力』、『最適解のプレーチョイス』、『周りの選手のシンクロ』がどうであったか、の振り返りが必要かもしれません。

いよいよ最終の4Qです。宮崎 (PG)、東藤 (SG/SF)、ステファニー (PF)、オコエ (PF)、高田 (PF) の5人でスタート。

立ち上がり、高田のドラッグスクリーンから宮崎のドライブによるローテの遅れを突いて、オコエの3P シュートが決まる。続けてオコエはトップの位置で宮崎からのボールを繋いで、パスフェイクから2本目の3P シュートを沈める。そしてリバウンドからのトランジションで走ったオコエが、宮崎からのパスを受け、このクォーター3本目となる3P を入れラトビアを突き放した。

ラトビアは日本のボールマンプレスに手を焼き、オフェンスが機能せず3P も含め得点が単発となる。ラトビアはディフェンスをゾーンにチェンジするが日本が中、外を上手く攻める。その後、日本は宮崎、ひまわりの3P シュート、渡嘉敷のゴール下が適確に決まる。ディフェンスの流れもよくなりラトビアに付け入る隙を与えずタイムアップとなる。トータル74対48で日本の勝利。次号に続きます。